

論文の内容の要旨

論文題目 アルジェリア・ウラマー協会のイスラーム改革主義運動

—ナショナリズムとの関係を中心に—

氏名 渡邊 祥子

本論文が扱うアルジェリア・ウラマー協会（1931年創設、以下「ウラマー協会」とする）は、フランス征服統治下のアルジェリアにおいて、ナショナリズム運動と並んで重要なものと考えられてきた、イスラーム改革主義運動を牽引した宗教団体である。しかし、イスラーム改革主義運動とナショナリズム運動の二つの運動については、「イスラーム改革主義運動には、アルジェリア国家の独立を目指すナショナリズム運動をナショナル・アイデンティティの形成によって文化面で補佐し、促進した側面があるものの、組織的大衆動員を手段とするナショナリズム運動に、やがて吸収された」という定説が、無批判に受け入れられてきた。そこで本論文は、ウラマー協会の政治思想と社会活動の両面について、一次史料に基づく実証分析を行うことにより、アルジェリアにおけるイスラーム改革主義運動の射程を、ナショナリズム思想・運動との関係において、明らかにした。

本論文の第1部においては、ウラマー協会のアラビア語テキストの分析に基づき、ウラマー協会の政治思想を分析し、政治と宗教の関係性について、ウラマー協会がアルジェリア・ナショナリスト政党の活動家らとは異なる理解を示していたことを明らかにした。

第1部第1章においては、ウラマー協会独自の集会的な主体概念である「アルジェリア・ムスリムのウンマ」（「ウンマ」は宗教共同体の意味）という概念が、アルジェリアの植民地的状況と、エジプトなどを発信源とする世界的なイスラーム改革主義思想の影響を、同時に受けつつ形成されたことを解明した。ウラマー協会は、世界に広がるイスラームのウンマの切り離せない一部としてのアルジェリア・ムスリムの集会的主体を、「アルジェリア・ムスリムのウンマ」と呼び、これと「フランス・ウンマ」との権利の平等を要求したことで、アルジェリア・ナショナリズムの主要な拠り所となる共同体観を築いたのである。

しかし、その反面、ウラマー協会の世界観と目的は、ナショナリスト政党とは全く異なるものだった。第1部第2章では、ウラマー協会の「政治」概念に対する理解を、ナショナリスト活動家のそれと対比しつつ、両者の相違を詳らかにした。ウラマー協会は、ウラマー協会をアルジェリア・ムスリムの「ウンマ」を統合する役割を果たす「神の党」と位置づけ、ウラマーこそが「ウンマ」の最高の指導者であるとした。これに対して、アルジ

エリアで行われている「政治」（ここでは、アルジェリア・ナショナリスト政党の諸活動のこと）は、ウラマー協会から見れば、むしろ「ウンマ」を分裂させ、対立させる望ましくないものとされた。このように、ウラマー協会は、ウンマを分裂させる「政治」に対して、ウンマを統合する「宗教」（イスラーム）が優越的な地位にあることを説くことで、ウラマー協会がナショナリスト政党に対して優越的な地位を持っていることを主張した。

以上、第1部では、ウラマー協会のイスラーム改革主義と、ナショナリスト諸政党のナショナリズムは、世界観を異にする別個の運動であることを示した。先行研究はしばしば、イスラーム改革主義運動をナショナリズム運動の「前史」として扱ってきたが、二つの運動は目的を異にし、一部の領域では共闘しつつも、方向性のずれを最初から抱え込んでいたことが明らかになった。

本論文の第2部では、第1部で示したウラマー協会の世界観や思想傾向を踏まえ、ウラマー協会がムスリム社会（ウラマー協会は「ウンマ」と呼んだ）において実際に行った活動を、一次史料に基づきつつ、実証的に記述し、その目的や傾向、社会への影響力を詳らかにすることを通じて、ウラマー協会の運動の社会的な検討を行った。具体的には、ウラマー協会の活動の主要な領域であるアラビア語・イスラーム教育（「自由アラブ教育運動」と呼ばれた）を第3章で、企業家への呼びかけと経済活動に果たした役割を第4章で、ムスリム・ボーイスカウト運動の促進を第5章で取り上げた。この三つの活動領域について、その全体像や時代ごとの推移のデータを示しながら明らかにし、第1部で解明したウラマー協会の世界観が、実際の活動に反映されていることを指摘した。

第2部第3章では、ウラマー協会の「自由アラブ教育運動」を扱い、この運動が、アルジェリアという祖国への愛着を教える私立学校（自由マドラサ）を全国に建設することで、フランス教育に欠落しているイスラームとアラビア語をムスリム子弟に教え、「アルジェリア・ムスリムのウンマ」の文化的な均質性を実現することを目的としたことを明らかにした。こうした自由マドラサの教師たち（自由ムアッリム）は、アラブ諸国への留学生派遣によって育成されたが、留学生には学位取得後の帰国と自由ムアッリムとしての労働義務が課されていた。このように、フランス風の教育階梯から自律した「アラブ教育」の階梯を、初等教育から中等・高等教育に至るまで、時間をかけて築き上げていった運動拡大の過程に、フランス教育に匹敵する質を持ち、アルジェリア・ムスリムの共通文化を体現するような「アラブ教育」制度を建設しようとした、ウラマー協会の意図が読み取れる。

続く第4章では、ウラマー協会の経済思想と、協会の財政的な支えとなっていたムスリム企業家たちを取り上げた。ウラマー協会は、ムスリム自身による経済活動と、積極的な相互扶助を通じたウンマの「復興（ナフダ）」を主張しており、この理念に基づくものとして、ムスリム企業家の共同事業や、ムスリム企業家による自発的な利益団体の形成を後押しした。寄付行為を通じてウラマー協会の活動を支えていたムスリム企業家たちは、社会的出自や政治キャリアにおいては多様であった。しかし、官（アルジェリア総督府）主導の産業化政策の中で、実際は末端行政組織として機能している政府系の協同組合や金融機関が、政府へのコネや既得権を持つ一部の者だけに利益分配をしていた、当時のアルジェリアの経済構造の実態に不満を持ち、既得権を持たない者がビジネスチャンスを得るための、新しい経済活動の形態に関心を持っていた点は、共通していた。彼らムスリム企業家たちは実際に、ウラマー協会と人脈的なつながりを持ち、出資者がムスリムのみから成る貿易会社「アーマール社」（1946年）などを実現しており、同社の理念には、ムスリムの資本をムスリムの手で活用し、利益の一部を貧しい者に還元するという、ムスリム同士の連帯と社会福祉思想が見られた。こうした例から、ウンマ「復興」のための積極的な経済活動、相互扶助というウラマー協会の理念が、これらのムスリム企業家たちにとって、一種の経済ナショナリズムとして機能した側面があったことを示した。

第2部第5章では、ムスリムによるボーイスカウト運動（「ムスリム・スカウト運動」と呼ばれた）とウラマー協会との関係を扱った。ウラマー協会は黎明期の「ムスリム・スカウト運動」を、ムスリム青少年の教育を利するものとして援助した。「ムスリム・スカウト運動」に対して、ウラマー協会は、「自由アラブ教育運動」と連携してその活動を助けたり、ムルシド（指導師）として宗教教育を実施したりする役割を負ったが、ウラマー協会による「ムスリム・スカウト運動」への援助は、ウラマーとスカウト運動家たちの間の、人格的な関係に負っている側面が強かった。かつ、1948年に「ムスリム・スカウト運動」を政党活動に利用しようとしたナショナリスト政党（PPA-MTLD）によって、ムスリム・スカウトの全国連盟が二つに分裂してしまっただけで以降も、ウラマー協会は、出来る限りの中立的な姿勢を貫いた。第5章は、ウラマー協会が反 PPA-MTLD 派のスカウト連盟「BSMA」と組織的にはより近く連携しつつも、PPA-MTLD の傘下に入った従来の連盟「SMA」に対しても、引き続き個人レベル、ローカル・レベルの関係を保ち続けたことを、機関誌などの分析を通じて明らかにした。当時の協会代表イブラーヒーミーが BSMA のキャンプで行った演説では、ウラマー協会が党派を超越した「神

の党」であることが再び強調されている。このことは、ウラマー協会が「ムスリム・スカウト運動」等の結社（association）運動においても、ウンマの宗教的指導者という立場を守り、党派主義から距離を取ろうとしたことを示す。

本論文の分析を通じ、フランス当局、および、アルジェリア・ナショナリスト政党との関係を、ウラマー協会が、「国家」・「政府」と「宗教」との関係として、あるいは、「政治」と「宗教」のあるべき関係の問題として、把握していたことが解明された。ウラマー協会は、一方でフランス当局に対し、政治制度（植民地国家）に対する宗教・文化共同体の自律性を主張した。他方で、ナショナリスト政党に対しては、「神の党」を標榜することによって、諸政党が活動する「政治」の次元に対して、より高次の領域である「宗教」を代表する、自分たちウラマー協会の優越性を強調した。フランス当局やナショナリスト政党とのこのような関わりを通じて、ウラマー協会の自己定義にとって、ウラマーの専門領域としての「宗教」領域が、次第に中心的な論点になっていったのである。ウラマー協会のこうした営み全体が、中世イスラーム世界とは著しく異なる状況—西洋的な法制度を中心に据える近代国家や、政治政党による議会政治といった新しい状況—の前で、「宗教」を防衛し、その実践を守る者（「ウラマー」つまりイスラーム知識人）を自認する者たちが行った、近代国家との関係のさなかでの、「宗教」の再定義の過程であったと、本論文は結論付けた。